

琉球大学学術リポジトリ

沖縄県における家庭婦人バレーボールに関する一考察

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-08-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浜元, 盛正, 宮城, 勇, Hamamoto, Morimasa, Miyagi, Isamu, 濱元, 盛正 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/1358

沖縄県における 家庭婦人バレーボールに関する一考察

浜元盛正 宮城 勇

A Study of Housewives' Volley—Ball Games in Okinawa Prefecture

Morimasa HAMAMOTO* Isamu MIYAGI**

(Received Aug. 30, 1986)

Summary

This paper has two purposes. The first is to investigate the present situation of volleyball activities among housewives; the second is to investigate the background and structure of family and society which surround housewives' sports activities.

The results of the investigation are as follows :

A. Background and structure of family and society

1. Of the housewives we surveyed, those who are in five—member families were the most numerous, comprising 34.4% of the total.
2. The overwhelming majority (85.7%) were in two-generation families, and a few were in three-generation families.
3. Most of them are high school graduates; a few junior college or college graduates.
4. 50.7% of them have wage earning jobs, some of which are part-time.
5. Many of them used to do track and field and some used to play softball or ping-pong.
6. 65% of them have experience in playing volleyball while in junior or senior high school.

*Phys. Educ., Coll. of Liberal Arts, Univ. of the Ryukyus

**General Education Department of Okinawa Kokusai University

7. The group with a history of 5—6 years experience in playing volleyball is larger than the group with 7—8 years.
8. It was found that the children (74.0%) were much more supportive of their mothers' volleyball activities than the husbands (58.0%) were.
The parents-in-law (46.6%) were least supportive of all.
9. Baseball was found to be the most popular sport among the children and the husbands.
10. Housewives who participate in volleyball activities are also active in their daily life. Most of them not only enjoy other kinds of sports but also take various opportunities to cultivate themselves.
11. Women in the southern and northern parts of Okinawa get up early and go to bed early. On the other hand, those in Naha, on offshore islands and in the central part comparatively get up late and go to bed late.

B. Sports activities

1. Most of them said they started playing volleyball because they liked it. A few said they started it to kill time or divert themselves from loneliness.
2. Almost all of them have experience in participating in official volleyball games.
3. The main reasons given for playing volleyball are as follows :
1) to maintain good health; 2) to make new friends or to find someone to talk to; 3) to keep physical and mental youthfulness.

緒 言

経済の高度成長にともなう家庭電化製品の普及、出産率の低下、あるいは核家族化などにより、主婦の家事労働が著しく軽減され余暇時間が極度に増大してきた。^{注1)}そして今やこの余暇の増大が、余裕のある豊かな生活のための、新たな問題を提起しつつあると言っても過言ではない。^{注2)}

この問題解決の一つとして、昨今スポーツに対する評価が次第に高まり、家庭婦人のスポーツへの参加が著しくなっている。

東京オリンピック大会での女子バレーボール・チームの活躍を契機として誕生した家庭婦人バレーボールは、年々その勢いを増し、現在ではコミュニティ・スポーツの代表的競技種目として注目を浴びるまでになっている。^{注3)}

沖縄県でもかつては「家庭婦人スポーツ」・「若返り教室」などが中心の内容であった家庭婦人バレーボールも、今日では各地区の選手や指導者を集めて、質の向上を図るための技術講習会が中心内容となるまでに進歩発展している。^{注4)}

本論は、このように急成長して来た沖縄県の家庭婦人バレーボールの実態を分析検討することにより、家庭婦人バレーボールを取り巻く家庭・社会的状況を認識すると同時に、活動状況を把握し、併せて今後の課題を得ることを目的とするものである。

研究方法

1. 調査対象者及び人員

沖縄県家庭婦人バレーボール連盟に所属するチームを5地区（南部・那覇・中部・北部・離島）に区分した。

表1 調査人員

	南部	那覇	中部	北部	離島	計
配布数	40	115	170	35	20	380
回収数	30	92	147	25	14	308
回収率	75.0%	80.0%	86.5%	71.4%	70.0%	81.1%

調査人員は南部 40 人・那覇 115 人・中部 170 人・北部 35 人・離島 20 人、380 人の調査を実施、308 人の回収に成功した。なお全体の回収率は 81.1% である。

2. 調査時期

昭和59年 9 月～昭和59年11月

3. 調査方法

第10回全九州ママさんバレーボール優勝大会・沖縄県予戦大会の代表者会議で、調査の主旨・調査要領を説明し、アンケート用紙を配って大会当日に回収する方法を採った。又離島地区で代表者会議に出席できなかったチームには、大会当日に調査用紙を配り、後日郵送による回収を試みた。

結果と考察

1. 家庭・社会的状況

家庭・社会的状況については表2～12、図1～5に示す通りである。

1) 出身地（主たる生育地）

今回調査した全構成員の出身地（主たる生育地）を分析した結果は表2に示してある。これによると那覇市出身者が最も多く、39人の数字は全体の12.7%となり、次いで名護市の23人（7.5%）・本部町17人（5.5%）の順となっている。

女子高校バレーボールが比較的盛んな中部地区の出身者がやや少ない反面、本部町は高数値を示しているといえよう。

特筆すべきことは、県外の出身者が数地区に分散して存在し、総勢で18人、5.8%の数字を記録していることである。

表2 出身地（主たる生育地）

(単位：人)

地区 出身地	南部	那覇	中部	北部	離島	計
糸 満 市	4	1	0	1	0	6
東風平町	4	2	0	0	0	6
南風原町	1	2	1	0	0	4
大里村	2	0	2	0	0	4
佐敷町	0	1	2	0	0	3
知念村	0	1	1	0	0	2
豊見城村	3	0	1	0	0	4
与那原町	3	0	2	0	0	5
北大東村	0	0	1	0	0	1
南大東村	0	0	1	0	0	1
具志川村 (久米島)	0	1	0	0	0	1
中里村 (久米島)	1	2	0	0	5	8
伊是名村	0	0	2	0	0	2
伊平屋村	0	0	2	0	0	2
座間味村	0	1	0	0	0	1
那 覇 市	1	28	8	2	0	39
浦添市	0	2	7	0	0	9
宜野湾市	0	0	10	0	0	10
西原町	2	0	1	0	0	3
中城村	1	1	2	0	0	4
北中城村	0	0	1	0	0	1
北谷町	0	0	6	0	0	6

地区 出身地	南部	那覇	中部	北部	離島	計
沖 縄 市	0	1	13	0	0	14
具志川市	0	0	6	0	0	6
与那城村	0	3	5	0	0	8
勝連町	0	1	2	0	0	3
嘉手納町	0	0	1	0	0	1
読谷村	1	0	9	0	0	10
石川市	0	0	4	1	0	5
恩納村	0	0	3	0	0	3
金武町	0	0	0	2	0	2
名護市	0	2	8	13	0	23
本 部 町	0	3	9	5	0	17
今帰仁村	0	1	7	1	0	9
伊江村	0	1	1	0	0	2
大宜味村	0	2	2	0	0	4
東 村	0	0	2	0	0	2
国頭村	1	4	5	0	0	10
下地町 (宮古)	0	0	1	0	4	5
伊良部町 (宮古)	0	0	1	0	0	1
上野村 (宮古)	0	1	3	0	1	5
城辺町 (宮古)	0	2	1	0	1	4
平良市 (宮古)	0	3	0	0	0	3
竹富町 (八重山)	1	0	3	0	0	4

地区 出身地	南部	那覇	中部	北部	離島	計
写那国町 (八重山)	0	1	0	0	0	1
石垣市 (八重山)	0	2	1	0	0	3
鹿児島県	0	1	0	0	1	2
熊本県	0	3	0	0	0	3
福岡県	1	1	1	0	0	3
広島県	0	1	0	0	0	1
大阪府	0	1	1	0	0	2
岡山県	0	0	1	0	0	1
埼玉県	0	1	0	0	0	1
石川県	0	1	0	0	0	1
山形県	1	0	0	0	0	1
新潟県	0	1	0	0	0	1
秋田県	1	0	0	0	0	1
北海道	0	1	0	0	0	1
無記入	2	12	7	0	2	23

2) 家族構成

家族構成を地区別に概観してみると、南部では4人～5人家族が最も多く、次いで6人・3人の順となっている。那覇では4人・5人・6人の家族構成が目立つ。中部では5人・4人・6人の順で、北部で5人・6人家族が比較的多

く、離島では4人家族が大勢を占めている。

全体では、5人家族（34.4%）が最も多く、次いで4人（25.6%）・6人（20.5%）の順となっている。9人家族も那覇・中部・北部に1例ずつある。

表3 家族構成

(単位：人)

地区	構成員	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10以上	無記入	計
南部		0	1	3	8	8	6	2	2	0	0	0	30
那覇		0	3	6	31	28	16	2	4	1	0	1	92
中部		0	4	11	34	58	32	5	2	1	0	0	147
北部		0	0	2	2	9	7	3	1	1	0	0	25
離島		0	0	2	4	3	2	1	2	0	0	0	14

家族の構成員数は年々減少し、核家族化は一般的状況となっている。^{注5)} 子供の生活は大人との関わりの中で敏感に受容し反映されるものである。遊びやスポーツも例外ではない。スポーツ活動も含めた子供の生活は主として家庭・学校・地域という3つの場面で展開されていると考えられる。そして各場面で子供は大人と直接的・間接的に作用しあって生きている。すなわち子供は一面において、これら大人との関わりの中で社会化されていくと考えることができる。従って子供の健全な成長を願うとき、家族構成

は無視することの出来ない大事な要素を担っているといえよう。

3) 世代別家族構成

世代別家族構成は二世世代家族が全体の85.7%で圧倒的に多く、いわゆる核家族化の居住形態となっている。一方三世代同居は12.3%の低数値を示しているに過ぎない。

地区別では、北部・離島に三世代同居が多く、次いで南部の順となっており、那覇は最も少ない。

表4 世代別家族構成

(単位：%)

地区	世代	単 独	夫 婦	二 世 代	三 世 代	四 世 代	無 記 入
南部		0	0	86.7	13.3	0	0
那覇		0	2.2	88.0	8.7	0	1.1
中部		0	1.4	87.1	11.6	0	0
北部		0	0	72.0	24.0	4.0	0
離島		0	0	78.6	21.4	0	0
全 体		0	1.3	85.7	12.3	0.3	0.3

日本の老人のうち約半数が現在でも子供夫婦と一緒に同居世帯を営んでいるといわれている^{注6)}が、今回の調査では二世世代家族が三世代家族を圧倒しており、それを確認することは出来なかった。

老人世帯の息子夫婦のすまい方の理想として「スプーのさめない距離に双方が分かれて住む方がよい¹⁾」といわれている。今回の回答者の中にも、このような居住形態を取っている家族も多いのではなかろうか。

少なくとも、老人同居の世帯で、老人の果たし得る役割りも無視出来ないものがある。核家族化現象の進む中で、あらためて老人同居の再評価を試みることは意義あることではなから

うか。

4) 学 歴

表 5 学 歴

(単位：%)

地区 \ 学歴	中 学	高 校	短 大	大 学	専門学校	そ の 他	無 記 入
南 部	13.3	66.7	6.7	6.7	6.7	0	0
那 覇	21.7	62.0	1.1	3.3	9.8	1.1	1.1
中 部	21.8	59.9	3.4	6.1	6.1	0.7	2.0
北 部	24.0	52.0	0	4.0	20.0	0	0
離 島	7.1	78.6	7.1	7.1	0	0	0
全 体	20.5	61.4	2.9	5.2	8.1	0.6	1.3

構成員の学歴は表5に示した。これによると、高校卒業者が最も多く、どの地区でも共通して高い数値を占めている。高校の次には中学卒業者が比較的多い。三位群に南部で短大・大学・専門学校が6.7%の同率となっている。一方那覇では専門学校(9.8%)・大学(3.3%)の順で三位・四位群を形成している。中部では大学・専門学校、北部で専門学校がそれぞれ優位を占め、離島では高校に次いで中学・短大・大学が7.1%で二位群となっている。

全体では高校卒業者61.4%、中学卒業者20.5%、三位群には専門学校(8.1%)・大学(5.2%)の順で、短大・その他と続いている。

学歴とバレーボールの競技者人口、技術面における優劣等との因果関係は認められないように思われる。

5) 職 業

地区別に家庭婦人の職業の内訳を分析した結果「専業主婦」は南部が最も多く、全体の43.3%、那覇・中部でも34%台の数値を示している。

「共働き」は、上記3地区ではほぼ同様の31.5%～33.3%となっている。

「パート労働」についても中部の17.7%と那覇15.2%が他地区に比べてやや高い比率といえる。

北部・離島で目につくのは、前記3地区にみられない「共働き」の高率であろう。特に離島では64.3%の人が「共働き」の回答をしており、パートを含めると80%近くの人が働いていることになる。

全体では「共働き」35.4%・「専業主婦」34.1%で、パートを含めたいわゆる給与労働者は、全体の50.7%を占めている。

昔は女性は家庭にあって家を守り、子供を生み、育てる、いわゆる良妻賢母型が理想とされた。しかし今日の世界においては女性の社会的意味や、その占める位置が大きく認められつつあり、かつてなおざりにされていた女性の体育・スポーツも世界的規模のものになりつつあるといえよう。^{注7)}

各国において女性の視野が拡張され、働く女性の数が急増し、女性の社会的地位が向上するに従って女性のスポーツが大きく変容してきたことを示唆している。

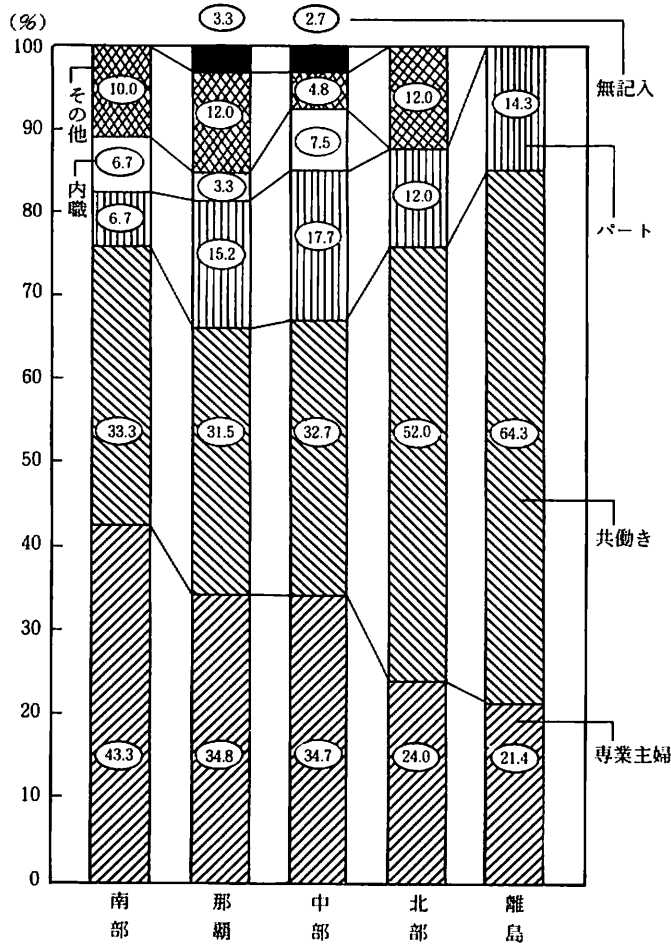


図1 職業の内訳

6) 過去に経験したスポーツ

過去に経験したスポーツは陸上競技が圧倒的に多く、ソフトボール・卓球・ジョギング等も優位な「経験種目」となっている。

「現在でも実施している種目」で特に著しいのはジョギングで、次いでバドミントン・ソフトボール・テニス等を指摘している人も多い。

表6 過去に経験したスポーツの有無

(単位：人)

項目 地区	陸上競技	テニス	バドミントン	バスケット ボール	卓球	ソフトボール	水泳	弓道	格技	ジョギング	その他	無記入	計
南部	18	4	4	8	7	9	5	0	0	9 ₍₁₎	1	6	71
那覇	40	15 ₍₃₎	19 ₍₂₎	25	27 ₍₁₁₎	17	18 ₍₁₎	0	2	24 ₍₂₎	1	14	202
中部	78 ₍₄₎	28 ₍₁₁₎	31 ₍₁₁₎	31	45	50 ₍₈₎	16	0	2	33 ₍₃₎	7	25	346
北部	8 ₍₁₎	2	1	2	4	3	1	0	0	7 ₍₆₎	0	7	35
離島	6 ₍₁₎	2	3 ₍₂₎	3	3	8	1	0	0	5 ₍₁₎	0	0	31
全体	150	51	58	69	86	87	41	0	4	78	9	52	685

↑ () 中の数字は現在も実施している人数を示す。

ここ10年ほどの間に、スポーツに参加する女性の数は男性の伸び率を遥かに上回っているとされている。^{注8)} 30代後半から40代にかけての女性の参加も目立つようになった。

子供に手がかからなくなったという母親役割りからの一部開放、電化・核家族化による絶対仕事量の減少がその主な理由と考えられる。女性スポーツの発展、スポーツ人口の拡大にとって好ましい現象であるといえよう。

7) 過去におけるバレーボール経験の有無とその時期

バレーボール経験の有無については図2の示す通りである。

過去においてバレーボールを経験したのは各地区共通して中学時代が高数値を示し、高校時

代が次位となっている。しかし離島は青年期の方が高校時代を上回った数字となっている。興味深いのは、青年期のバレーボール経験者は都市地区の那覇・中部で比較的少なく、離島・北部・南部では逆に多くなっていることである。

過去においてバレーボールを経験していない地区は北部が最も高く23.2%、以下離島(22.2%)・那覇(20.5%)の順となり、南部は過去のバレーボール経験者が最も多い地区にあげられる。

過去のバレーボール経験の有無・経験の時期・試合における成績との因果関係については、今回の調査では究明することが出来なかった。今後の課題としたい。

全体でも中学・高校での経験者が最も多く、約65%がこの時期にバレーボールを体験してい

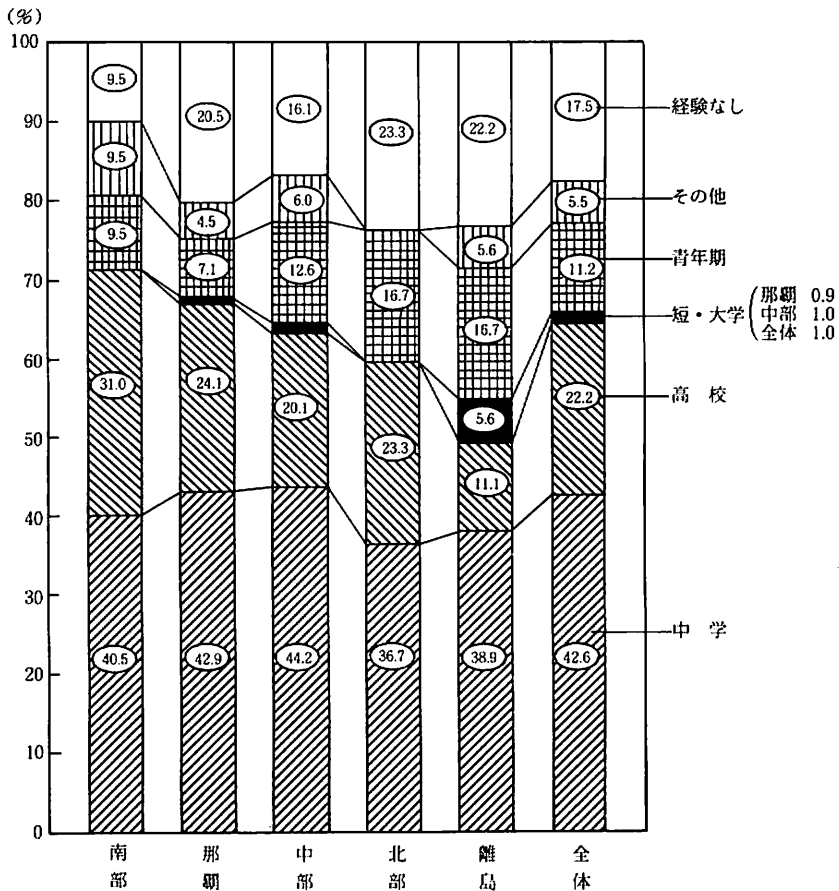


図2 バレーボール経験の有無とその時期

る。経験なしは17.5%，青年期の経験は11.2%，以下その他・短大・大学の順となっている。

家庭婦人バレーボールのクラブ員の殆んどが、若い頃、特に学校生活時代にバレーボールやその他の運動の楽しさ・面白さを体験したもので占められているといえる。

8) バレーボール歴

バレーボール歴は南部で5年～6年・1年～2年・7年～8年経験者が多く、1年未満は少ない。

那覇では5年～6年が全体の26.1%，次いで9年～10年（16.3%）・1年～2年（16.3%）の順である。

中部では1年未満からバレーボール歴19年以

上まで数値が分散し、5年～6年（18.4%）・7年～8年（16.3%）あたりに比較的高い回答がある。

北部では13年～14年が全体の24.0%を示し、7年～8年にも20.0%の高い数字がみられ、いわゆるバレーボールのベテランが多い地区といえる。

離島は19年以上に14.3%の回答があるが、9年～14年の間には回答がみられない。一方1年～6年には71.4%の数値を示し、全体的には比較的バレーボール歴の浅い構成員で占められている。

全体では5年～6年経験者が最も多く、次いで7年～8年・1年～2年・9年～10年の順となっている。

表7 バレーボール歴

(単位：%)

バレー歴 地区	1年 未満	1～ 2年	3～ 4年	5～ 6年	7～ 8年	9～ 10年	11～ 12年	13～ 14年	15～ 16年	17～ 18年	19年 以上	無記入
南 部	13.3	20.0	10.0	20.0	16.7	6.7	0	0	0	6.7	6.7	0
那 覇	5.4	16.3	10.9	26.1	12.0	16.3	2.2	3.3	5.4	1.1	1.1	0
中 部	2.0	13.6	12.9	18.4	16.3	15.6	3.4	2.7	4.8	1.4	6.8	2.0
北 部	0	4.0	12.0	16.0	20.0	12.0	4.0	24.0	4.0	0	4.0	0
離 島	21.4	14.3	14.3	21.4	7.1	0	0	0	7.1	0	14.3	0
全 体	4.9	14.3	12.0	20.8	14.9	14.0	2.6	4.2	4.5	1.6	5.2	1.0

9) 家族の対応

表8及び図3はバレーボールを始めて、家族の対応がどう変化したかについて分析した結果である。

表8 バレーボール実施と家族の対応の変化

(単位：人)

家族 項目 地区	親			夫			子 供			無記入
	協力的 になった	非協力的 になった	変化 なし	協力的 になった	非協力的 になった	変化 なし	協力的 になった	非協力的 になった	変化 なし	
南 部	0	0	4	13	1	12	22	0	6	2
那 覇	3	0	4	51	2	32	65	1	21	1
中 部	10	0	6	79	1	60	96	1	37	0
北 部	3	0	2	15	0	7	17	0	5	2
離 島	1	0	2	8	1	4	10	0	3	0

親の態度では、48.6%が協力的になり、51.4%が変わらない、と答えている。非協力的になったという回答はゼロである。

夫の協力は58.0%が「ある」と答え、40.2%は変わらない、1.7%は非協力的になったと答えている。

家族の中で最も協力的に変化したのは子供で、74.0%の高数値がそれを証明している。

全体的な傾向としては、子供・夫・親の支持を得て、気持の良い雰囲気の中でバレーボールに集中して練習出来る家庭環境を持っていると思われる。

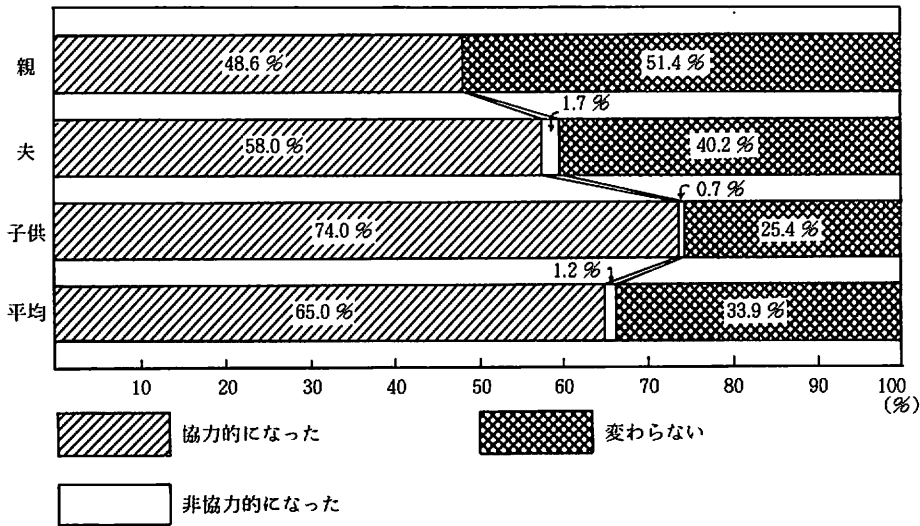


図3 バレーボール実施と家族の対応の変化(全体)

10) 家族が現在やっているスポーツ

「子供と夫がバレーボールを実施している」の回答が比較的多い。母親や父親のスポーツ実践が子供に好影響を与えている現象といえよう。

夫や子供が実施しているスポーツで最も多いのは野球で、どの地区でも高率の回答となっている。その他夫のスポーツでは、ジョギングやゴルフが目立つ。

同居家族の母親・父親のスポーツ実践者は極めて少ないが、ジョギングやゲートボールがその中では比較的サポートされているスポーツといえ

よう。

多くの生理学者がスポーツの効用として、思考力・集中力・記憶力の高揚を指摘している^{註9)}。さらに積極的な効果を主張する人は「ものごとをきっちり計画的に実行出来るようになる」²⁾と説いている。

生涯体育を考えると、今後はこれまで以上に家族全員で実践出来、楽しむことの出来る新スポーツの開発に努力すべき時代を迎えつつあるといえるのではないだろうか。

表9 家族が現在やっているスポーツ

(単位：人)

項目	南 部				那 覇				中 部				北 部				離 島			
	父	母	夫	子供	父	母	夫	子供	父	母	夫	子供	父	母	夫	子供	父	母	夫	子供
陸上競技	0	0	0	2	0	0	1	7	0	0	6	12	0	0	1	9	1	0	2	1
テニス	0	0	1	2	0	0	2	10	0	0	1	9	0	0	0	4	0	0	0	0
バドミントン	0	0	0	2	0	0	2	5	0	0	2	4	0	0	0	0	0	0	0	0
バスケットボール	0	0	0	4	0	0	1	9	0	0	1	20	0	0	0	2	0	0	1	1
バレーボール	0	0	2	9	0	0	14	24	0	0	17	34	0	0	5	9	0	0	3	2
卓球	0	0	0	0	0	0	1	3	0	0	1	5	0	0	2	2	0	0	0	0
ソフトボール	0	0	0	0	0	0	2	4	0	0	8	9	0	0	0	0	1	0	0	0
水泳	0	0	1	1	0	0	2	11	0	0	1	9	0	0	0	0	0	0	0	0
弓道	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
格技	0	0	0	2	0	0	4	9	0	0	4	9	0	0	2	1	0	0	0	0
ジョギング	0	1	3	1	1	0	5	1	2	1	13	5	0	0	4	2	1	0	1	2
野球	0	0	8	8	0	0	11	23	0	0	12	25	0	0	4	7	0	0	5	4
その他	1	0	0	4	0	2	16	8	2	0	15	13	0	0	0	0	1	1	1	0
全 体	1	1	15	35	1	2	61	114	4	1	81	154	0	0	18	36	4	1	13	10
実施者なし	5				17				31				2				3			

11) 日常生活でやっていること

表10はバレーボール以外に、日常生活でやっていることについての分析結果である。

スポーツの実践者は、同時に多くの趣味や活動にも積極的であることがわかる。家事・育児と多忙な「ママさん」は親戚づきあい・近所づきあい・友達づきあいも頻繁で、ピクニック・ショッピングにも意欲的といえよう。

書道・絵画・陶芸・読書に凝ったり、社会奉仕活動に参加するなど、スポーツ・ママは積極

ママでもあることがわかる。

日本人の余暇活動の大部分は見るレジャーで、わけてもテレビの視聴時間が最も高い^(注10)といわれている。余暇の実態は「テレビ寝」(テレビを寝ころんでみる)が主であるように、余暇があっても惰性的な生活に流される傾向がある。

スポーツや趣味・健全なレクリエーション活動などによって、健康や教養の向上を図ろうとする家庭の主婦にとって、バレーボールは価値ある存在となっていると考えられる。

表 10 バレーボール以外に日常やっていること

(単位：人)

項目	地区					
	南部	那覇	中部	北部	離島	計
ジョギング	6	10	15	10	5	46
テニス	2	5	4	1	0	12
水泳	1	10	4	0	1	16
散歩	2	4	7	0	1	14
体操(ラジオ体操 ヨガ・ストレッチ)	2	8	16	1	4	31
踊り・ダンス等	4	19	36	7	0	66
三味線・古典民謡	0	3	8	2	0	13
園芸・家庭菜園	8	24	39	3	2	76
料理・ケーキづくり	9	17	21	3	0	50
編物・ぬいもの	14	26	43	5	3	91
その他の趣味・けい こごと	1	8	20	1	1	31
ピクニック・ビーチ パーティ	12	18	35	8	1	74
県内・外の旅行	9	16	23	4	0	52
外食・ショッピング	11	39	58	6	2	116
映画・しばいの鑑賞	6	8	10	1	0	25
スポーツの観戦	15	32	62	6	7	122
パチンコ・マージャン	0	1	0	0	0	1

項目	地区					
	南部	那覇	中部	北部	離島	計
ラジオ・テレビ	24	42	66	6	3	141
その他のレジャー	0	2	2	0	0	4
書道・絵画・陶芸	2	6	12	4	0	24
お茶・生花	2	15	9	2	0	28
音楽・美術鑑賞	1	7	12	3	0	23
小説・詩・俳句づくり	0	1	3	0	0	4
読書	15	26	37	4	2	84
調査研究	0	0	0	0	0	0
その他教養に関する こと	1	3	8	1	0	13
社会奉仕活動	1	11	18	1	0	31
外での仕事(定職)	10	28	49	11	5	103
家事	22	56	96	15	4	193
育児	15	31	55	9	3	113
親戚・近所づきあい	21	46	81	11	3	162
友達づきあい	19	47	88	15	4	173
無記入	0	9	9	2	1	21

12) ディナー・サービスの利用

ディナー・サービスは夕食の材料を注文で定期的に取り寄せ、夕食準備の簡素化と栄養配分

の合理化をねらいとしたシステムである。

表11、図4の示す通り、各地区でのディナー・サービスの利用は「全くない」が圧倒的であ

表 11 ディナー・サービスの利用

(単位：%)

地区	利用の有無	利用の有無				
		週5回以上	週3～4回	週1～2回	全くない	無記入
南部		0	0	6.7	83.3	10.0
那覇		1.1	6.5	5.4	76.1	10.9
中部		0.7	2.0	4.1	82.3	10.9
北部		0	0	16.0	64.0	20.0
離島		0	0	7.1	78.6	14.3
全体		0.6	2.9	5.8	78.9	11.7

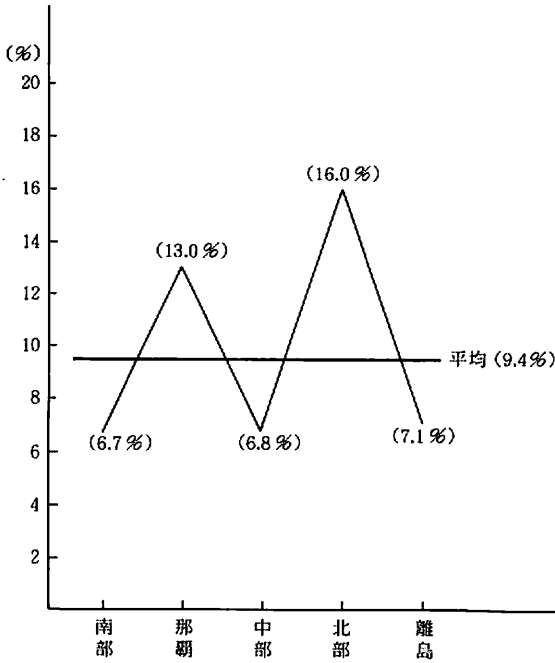


図4 デイナー・サービスの利用（全体）

る。地区別の利用では北部（16.0%）が最も多く、次いで那覇（13.0%）・離島（7.1%）の順となっている。

調査前に予想した数字をはるかに下回った利用者数となっている。その主とした原因が、ディナー・サービスの普及・定着が未開発のせいなのか、あるいはスポーツを実践している家庭婦人の生活観念に由来するものか、今回の調査で結論するには至らなかった。今後の研究課題としたい。

13) 起床・就床・睡眠時間

表12によれば、南部・北部では朝が早く、就床時刻も早い。一方那覇・離島・中部では比較的朝が遅く、就床時間も遅いいわゆる宵型の生活形態となっている。

図5は全体の睡眠・起床・就床時間を円グラフに表わしたもので、この図によると睡眠時間は約7時間が全体の47.6%で最も多く、南部を除く各地区でトップをなしている。以下6時間33.3%、約8時間は17.7%の回答である。

起床時刻については6時前後の起床が最も多く、次いで7時、5時前後の起床となっている。

就床時刻については、11時前後の就床が最高率で49.7%を示し、12時前後の35.7%がその次に位置している。

表12 起床・就床・睡眠時間

(単位：%)

項目 地区	起床時					就床時					睡眠時間				無記入
	5時前後	6時前後	7時前後	8時前後	9時前後	9時前後	10時前後	11時前後	12時前後	1時前後	約6.0	約7.0	約8.0	約9.0	
南部	10.3	69.0	20.7	0	0	0	10.3	41.4	37.9	10.3	48.3	41.4	10.3	0	3.4
那覇	8.9	47.8	42.2	1.1	0	0	4.4	55.6	31.1	8.9	30.0	47.8	21.1	1.1	2.2
中部	5.1	63.5	29.2	0.7	1.5	0.7	6.6	46.0	38.0	8.8	35.0	46.0	18.2	0.7	7.3
北部	0	88.0	12.0	0	0	0	4.0	64.0	32.0	0	28.0	60.0	12.0	0	0
離島	0	61.5	30.8	0	7.7	0	15.4	38.5	46.2	0	15.4	53.8	15.4	15.4	7.7
全体	6.1	61.2	31.0	0.7	1.0	0.3	6.5	49.7	35.7	7.8	33.3	47.6	17.7	1.4	4.5

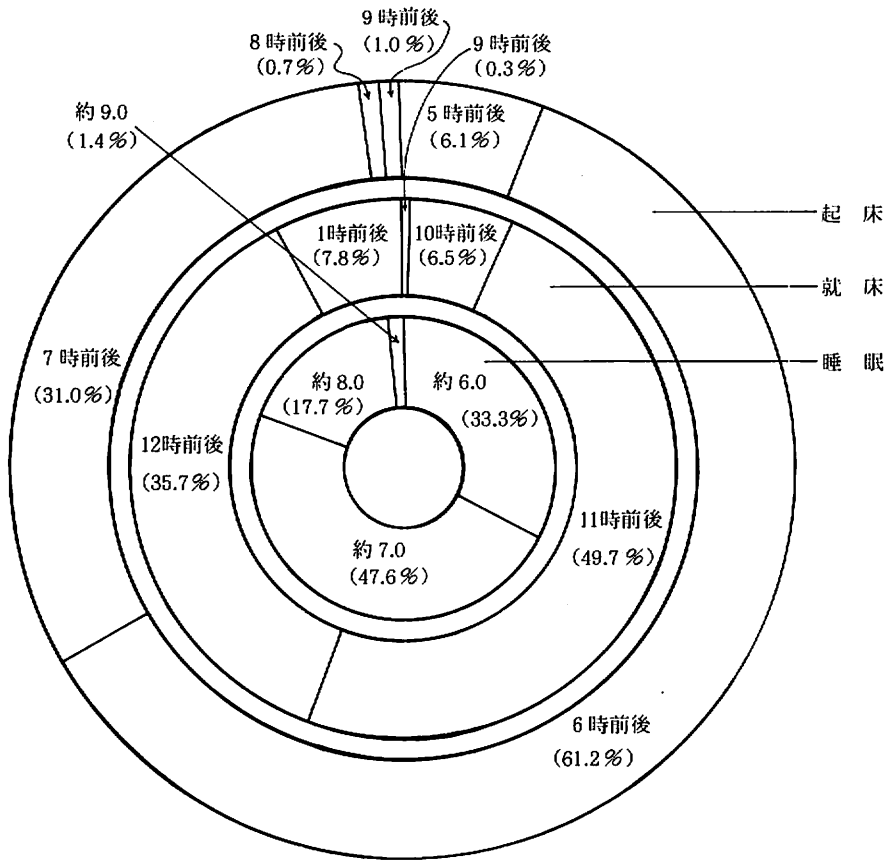


図5 起床・就床・睡眠時間(全体)

睡眠は何物をもってしても代用することはできない。必要な睡眠量は年齢・性・季節・個人差・疲労度・環境などによって一定ではないが、一般にスポーツ人は8.0時間～9.0時間を必要とするといわれている。^{注11)} 今回の調査結果では、この理想とする睡眠時間に比べるとやや少ないといえる。

2. 活動状況

表13～16、および図6はバレーボール活動について調査した結果である。

1) バレーボールを始めた動機

バレーボールを始めた動機は「バレーボール

が好きだから」の回答が各地区共通して高数値となっている。これは全体平均でも27.8%で最高を示している。

地区別では南部で「健康と美容のため」(30.4%)、次に「バレーボールが好きだから」・「交際・友達づくり」等が主な動機となっている。

全体の傾向でも、上記3項目が一位～三位群を形成し、次いで「バレーボールの経験があるから」と続いている。

一方「子供への手本」を期待する回答は比較的少なく6.6%、「ひまつぶし」・「さびしいので」はそれぞれ0.6%・0.9%と極めて低い回答率となっている。

表 13 バレーボールを始めた動機

(単位：%)

項 目	地 区					
	南 部	那 覇	中 部	北 部	離 島	計
ひまつぶし	0	1.0	0.4	0	2.1	0.6
さびしいので	1.1	1.4	0.8	0	0	0.9
健康と美容のため	30.4	25.8	26.9	29.3	23.4	26.9
交際・友達づくり	21.7	23.1	21.7	22.0	17.0	21.9
好きだから	28.3	28.1	27.6	29.3	25.5	27.8
誘われてなんとなく	1.1	4.4	4.4	2.4	6.4	4.0
子供への手本	8.7	6.8	6.9	3.7	4.3	6.6
バレーの経験が過去にあるから	6.5	6.4	8.8	13.4	12.8	8.4
スポーツの経験(バレー以外の)があるから	2.2	2.7	2.1	0	6.4	2.3
そ の 他	0	0.3	0.4	0	2.1	0.4
無 記 入	0	0	0	0	0	0

2) 公式競技参加の有無

公式競技の参加は、各地区共に「有る」が圧倒的に多いといえる。全体でも91.9%となっており、各地区共に全員の試合参加を最大の目標に練習していることがわかる。

「無い」の全体平均は6.8%となっているが、将来はこの数字がますます小さくなっていくことを期待したい。「ママさんバレー」の初期のねらいも「みんながレギュラー」にあったのではなかろうか。

スポーツというとすぐにオリンピックや厳しいトレーニングを思い浮かべる人が多いかと思うが、現代社会では他人との闘争よりも、自分自身の充実の度合いや、その管理の方が大きな意味を持っているといわれている。^{注12)} スポーツの試合に勝つことよりも、スポーツをやった良かったと感じ、またそれを通して健康管理も出来るということが「ママさんバレー」の最大の誇りであり第一の基本理念とすべきではなかろうか。

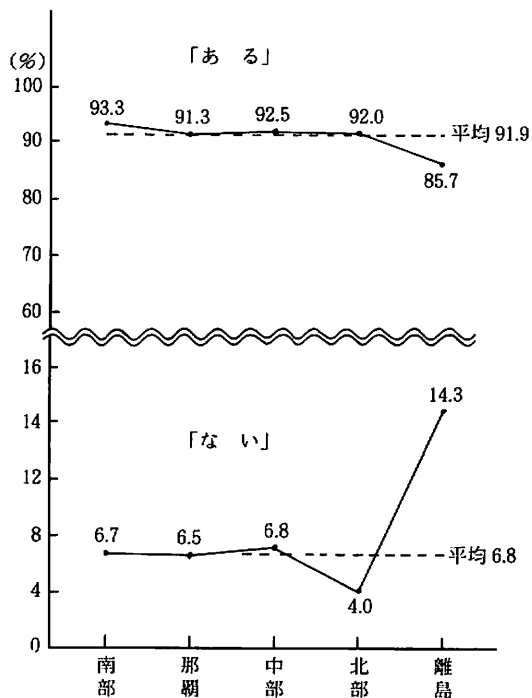


図 6 公式競技参加の有無

3) バレーボール競技の意義およびその特質

表 14 バレーボール競技の意義

(単位：人)

地区	勝 負			参 加			フ ェ ア ー 精 神			無記入
	1 位	2 位	3 位	1 位	2 位	3 位	1 位	2 位	3 位	
南 部	2	1	22	27	2	1	1	22	2	0
那 覇	14	17	43	73	7	7	4	47	21	2
中 部	12	34	71	116	14	8	17	64	33	2
北 部	1	2	18	22	0	1	1	19	2	1
離 島	3	1	5	7	5	0	0	5	6	0
全 体	32	55	159	245	28	17	23	157	64	5
	246 (31.3%)			290 (36.9%)			244 (31.1%)			5(0.6%)

バレーボール競技の価値や意義をどこにおいて日頃の練習や試合に臨んでいるのかについて調査した結果、各地区で図らずも全く同様の結果が出た。すなわち「参加すること」に最も

多くの回答が集中し、「フェアな精神」は第二位、「勝負」は最少の回答となった。勝利至上主義の昨今のスポーツ界の中では特筆すべき現象といえるのではなからうか。

表 15 バレーボール競技の特質

(単位：%)

項 目	南 部	那 覇	中 部	北 部	離 島	計
バレーが楽しく、生きがいを感じる	11.3	12.9	15.7	17.8	11.8	14.4
健康の保持・増進によい	24.3	19.7	21.0	18.8	15.7	20.5
友達・話し相手ができる	18.3	15.7	16.4	14.9	15.7	16.2
責任感・協調精神が培われる	10.4	11.7	10.0	8.9	15.7	10.7
家族関係に良い	3.5	8.0	5.0	5.9	3.9	5.8
心身の若さを保つのによい	16.5	15.7	14.2	16.8	17.6	15.2
子供達への感化期待	5.2	6.2	7.8	5.9	5.9	6.9
計画性のある充実した生活が出来る	10.4	8.5	9.3	9.9	13.7	9.4
そ の 他	0	1.5	0.5	0	0	0.7
無 記 入	0	0.2	0	1.0	0	0.2

またバレーボールをやって何が特に良かったかという質問には、南部から離島までの5地区において回答がほぼ一致している。すなわち「健康の保持増進によい」・「友達や話し相手が出る」・「心身の若さを保つのによい」・「バレーボールは楽しく生きがいを感じる」等が高

数値を示している。

一方「子供達への感化」(6.9%)や「家族関係に良い」(5.8%)には回答が少ない。

バレーボールの練習を継続することで、「計画性のある充実した生活が期待出来る」にも南部・離島で二桁台の支持が得られ、全体でも9.4

%となっている。

ともあれバレーボールの練習は予想以上の波及効果を生み、家庭婦人の生活に良い影響を与えているように思われる。

4) バレーボールを実施する上で不都合なこと

表16によれば、家庭婦人のスポーツ実践上、日常生活で不都合なこととして各地区でトップ

にあげていることは、「バレーボールと家庭の行事がかちあいがち」である。次に「一家団らんの機会が少ない」・「家事・育児がおろそかになりがち」などが少率ながら主な項目となっている。

体育・スポーツの実現にはどうしても避けられない現象で、過度の状況でない限り、やむを得ないのではないだろうか。

表 16 バレーボール実施上不都合なこと

(単位：%)

項 目	地 区					
	南 部	那 覇	中 部	北 部	離 島	計
家事・育児がおろそかになりがち	18.2	12.2	6.3	4.7	14.3	9.6
仕事に支障をきたしがち	3.6	9.6	8.8	14.0	7.1	8.8
自分の自由な時間が持てない	1.8	4.5	7.1	7.0	10.7	6.0
一家団らんの機会が少ない	20.0	9.6	10.9	7.0	7.1	11.0
バレーボールと家庭の行事がかちあいがち	29.1	20.5	22.3	27.9	14.3	22.5
出費がかさむ	0	5.1	5.0	0	10.7	4.4
家族からの苦情がよくでる	5.5	4.5	5.5	9.3	3.6	5.4
友達つきあいが出来ない	1.8	2.6	1.7	0	7.1	2.1
チーム・メイトとのコート外での交際が多過ぎる	0	1.9	2.5	4.7	0	2.1
そ の 他	3.6	3.2	0.8	4.7	0	2.1
不都合は全くなし	16.4	26.3	29.0	20.9	25.0	26.0

むしろ「不都合は全くない」(26.0%)が示すように、全般的に、家庭婦人のバレーボール実践は、対人・対家族にとっても良好な形で営まれていると見てよいのではなかろうか。

要 約

本研究の目的は、家庭婦人バレーボールの現状の認識と、家庭婦人バレーボールを取り巻く家庭・社会的状況、活動状況などを把握し、併せて今後の課題を得ることであった。

主な結果を要約すると次の通りである。

1. 家庭・社会的状況

出身は那覇市出身者が最も多く、全体の13%近くを示し、県外出身者は総勢で18人、5.8%の数値である。

家族構成は5人家族が最も多く、全体の34.4%である。

世代別の居住形態は、二世帯家族が圧倒的(85.7%)で、三世帯同居家族は著しく少ない。家庭婦人バレーボールの実施者は、高校卒業者が断然多く、短大や大学卒業者は比較的少ないといえる。

専業主婦は全体の34.1%で、パート労働を含めた給与労働者は50.7%を占めている。

過去に経験したスポーツは、陸上競技が最も多く、ソフトボールや卓球にも回答がある。

過去におけるバレーボールの経験は、中学・高校時代が最も多く、全体の約65%を占めている。

バレーボール歴は5年～6年が最も多く、次いで7年～8年の順となっている。

バレーボールを始めて最も協力的になったのは子供(74.0%)で、夫(58.0%)・親(48.6%)も協力的になり対応の変化を見せている。

家族が実施している代表的なスポーツは、子供・夫共に野球が顕著である。

家庭婦人のバレーボール実施者は、日常生活も積極的で、他のスポーツや趣味・教養の向上のための講座にも参加している人が多い。

ディナー・サービスの利用は「全く利用していない」が圧倒的である。

起床時刻は南部・北部では朝が早く、就床時刻も早い。一方那覇・離島・中部では比較的朝が遅く、就床時刻も遅い傾向がある。

2. 活動状況

バレーボールを始めた動機は「バレーボールが好きだから」が最も多く、「ひまつぶし」・「さびしいので」への回答は極めて低い数値となっている。

公式競技大会には、ほとんど全員が参加の体験を持っている。

バレーボールの意義は「参加すること」に最高率の回答を得た。一方バレーボールを実施している主な理由は「健康の保持増進によい」・「心身の若さを保つのによい」等をあげている。

バレーボール実施上で不都合なことは、ほとんどみられないが、極く少数の人が「バレーボールと家庭の行事がかちあいがち」の項目を支持している。

今回の調査は、家庭婦人バレーボールの実施者の現状把握を中心として考察を進めたが、家庭婦人バレーボールの「実体」という点では十分な研究を尽くすことが出来なかった。

今後は年齢別にみたバレーボール実施者、家庭婦人バレーボール・チームのリーダーや指導者に

焦点を絞って研究してみたいと考えている。

謝 辞

本研究の調査にあたり、沖縄県家庭婦人バレーボール連盟の多大なご協力をいただいた。心から感謝の意を表します。

注

- 注1) 梅村清弘, スポーツ社会学—その構想と展開—, 講談社, 1973. pp. 63-88.
- 注2) 高橋和敏・今村義正(編), 社会体育とその指導, 東海大学出版会, 1979. pp. 4-11.
- 注3) 梅村清弘, スポーツ社会学—その構想と展開—, 講談社, 1973. pp. 259-67.
- 注4) 沖縄県家庭婦人バレーボール連盟理事との談話から
- 注5) 佐伯聡夫(編), 「現代スポーツの社会学」菅原禮(監), スポーツ社会学講座, 第3巻, 不味堂出版, 1984. p. 34.
- 注6) 石川中・森沢康(編), 健康哲学のすすめ, 有斐閣, 1976. p. 130.
- 注7) 佐伯聡夫(編), 「現代スポーツの社会学」菅原禮(監), スポーツ社会学講座, 第3巻, 不味堂出版, 1984. pp. 189-210.
- 注8) 佐伯聡夫(編), 「現代スポーツの社会学」菅原禮(監), スポーツ社会学講座, 第3巻, 不味堂出版, 1984. p. 216.
- 注9) 水野忠文・猪飼道夫・江橋慎四郎, 体育教育の原理, 東京大学出版会, 1973. pp. 176-89.
- 注10) 石川中・森沢康(編), 健康哲学のすすめ, 有斐閣, 1976. p. 207.
- 注11) 黒田善雄(編), 「スポーツの医学」, 講座 現代のスポーツ科学, 第3巻, 大修館書店, 1980. pp. 13-16.
- 注12) 波多野義郎, 新しい健康づくり—現代人のフィットネス理論—, 日本YMCA同盟出版部, 1978. p. 109.

引用文献

- 1) 石川中・森沢康(編), 健康哲学のすすめ, 有斐閣, 1976. p. 133.

2) 藤森間一・飯塚鉄雄(編), 健康増進と科学—健康科学へのアプローチ, 不味堂出版, 1978. p. 85.

参 考 文 献

1. 広田公一, 「スポーツと年齢」高石昌弘・宮下充正(編), 講座 現代のスポーツ科学, 第4巻, 大修館書店, 1980. pp. 37-38.
2. 波多野義郎, 新しい健康づくり—現代人のフィットネス理論—, 日本YMCA同盟出版部, 1978. pp. 45.
3. 石黒国雄, 「日本体育史」大石三四郎・竹内虎士(編), 新体育学大系, 第10巻, 逍遙書院, 1980. p. 195.
4. 久保田競, 頭をよくするランニング, 講談社, 1983. pp. 105-19.
5. 黒田善雄(編), 「スポーツの医学」, 講座 現代のスポーツ科学, 第3巻, 大修館書店, 1980. pp. 15-23.
6. 佐伯聡夫(編), 「現代スポーツの社会学」菅原禮(監), スポーツ社会学講座, 第3巻, 不味堂出版, 1984. p. 120.
7. 笹本正治, 「コーチング理論」大石三四郎・竹内虎士(編), 新体育学大系, 第45巻, 逍遙書院, 1980. p. 87.
8. 高橋和敏・今村義正(編), 社会体育とその指導, 東海大学出版会, 1979. p. 9-11.